



「この子はかけがえない宝物」という、親としての視点大切にしたい」と話す水嶋さん

29 家庭的保育者(保育ママ)

* 市区町村の研修あり

家庭的保育者は、親が共働きなどで保育が必要な乳幼児を3人まで(補助の保育士などがある場合は5人まで)預かることができる。保育所と同じく、原則として月曜日から土曜日の日中に行う。運営費用は、保護者が払う保育料と、国と自治体からの給付で賄う。全国で958人(2016年)が活動している。

市区町村の研修を受講し、認可を受けてなる。保育士や幼稚園教諭などの資格を求める自治体も多い。保育場所は、自宅のほか公共施設などでもいいが、面積や設備などの基準がある。3歳以降の受け入れ先として、近隣の保育園や幼稚園、認定こども園と連携する必要がある。



水嶋昌子さん 58

少人数でのびのびと

「さあ、公園に行つてドングリを拾つてみよう」
自宅マンションのリビング

で呼びかけると、子どもたちから歓声が上がった。台所からは、給食を準備する包丁の音が聞こえ、焼き魚の香りが漂ってくる。

現在は、1歳の男女と3歳の男女計4人を自宅で預かる。補助の保育士と調理員を加えた手厚い体制で見守る。東京都内の保育所で保育士として働いていた時、自宅などで少人数の子どもの預かる「家庭的保育」を知った。会社の夫は転勤族。「これな

らどこへ行っても続けられるし、私がかにいわば3人の息子も喜んでくれる」と、川崎市への引越を機に14年前に活動を開始。次第に「地域に根ざした子育て支援こそ家庭的保育の本領」との思いが強くなり、結局、夫が転勤になると、単身赴任してもらった。「臨機応変」が小規模の強みという。「例えば、もう少しでプランクに乗れるようになりそうというとき、時間がからと中断したら、また一からやり直し」。子どもたちとも話し合いながら、活動内容や時間を調整している。

まだ働き盛りの夫を4年前に病気で亡くした時は、「早くみー先生の所に行きたい」という子どもたちの声に押し



紙おむつや着替えなど必需品が詰まったリュック。「非常時にはこれを背負い、子どもを抱えて走り」

* 私の相棒

れ、1か月ほどで再開した。「子どもは、詳しく説明しなくても、こちらの気持ちをちゃんと分かっている。そのまっすぐな心に触れることが立ち直る支えになったという。子どもたちは3歳の年度末に卒業し、保育所に移る。集団生活も、成長に必要なステップ。それまではのびのびと育てたい」
(飯田祐子)